

特集3 「国際学部のSDGsの取り組み」

「アフガニスタンと平和」シンポジウム②

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター・連続セミナー実施報告書

企画：清水 奈々子・藤井 広重

報告書執筆者：宇都宮大学国際学部国際学科4年 阿閉陽香、3年 武田逸輝

2021年12月3日に、国連アフガニスタン支援ミッション政務官、及びピースウィンズ・ジャパンのアフガニスタン現地代表として現地に6年間滞在されていた平井礼子様をお招きし、宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター国際平和と人権・人道法研究会と国際学部清水奈名子研究室の共催にて、「アフガニスタンと平和」シンポジウムが開催された。



(中村真国際学部長による開会の挨拶)

前半は現場での活動経験についてお話を頂いた。平井様は2004年から、ピースウィンズ・ジャパンというNGOの一員としてアフガニスタンで活動された。この団体は主に紛争地帯や自然災害で被害を受けた地域で人道支援をしており、アフガニスタンにおいては2001年のアメリカ侵攻でタリバン政権が崩壊したのを機に、難民支援を開始した。現地での仕事としては、国外や難民キャンプから村に帰った市民の生活のため、食糧支援や女性の収入向上支援などが行われた。

その後平井様は2008年に、国連アフガニスタン支援ミッション（UNAMA）政務官に就任さ

れ、国連の政治ミッションとして和平プロセスのためのアドバイスや国際社会からの支援調整などの業務に当たられた。そして2011年末に平井様はアフガニスタンでの活動を終えられ、現地を離れている。

2021年現在、アフガニスタンは8月の米軍の撤退をきっかけとしてタリバン政権の勢力が拡大し、9月にはタリバン暫定政府が発足するなど厳しい状況が続いている。20年にわたる国際社会のアフガニスタンへの支援はタリバン政権の再樹立という形で終了した。本講演の後半では、アフガニスタンへの国際支援の失敗の原因に関してお話を頂いた。



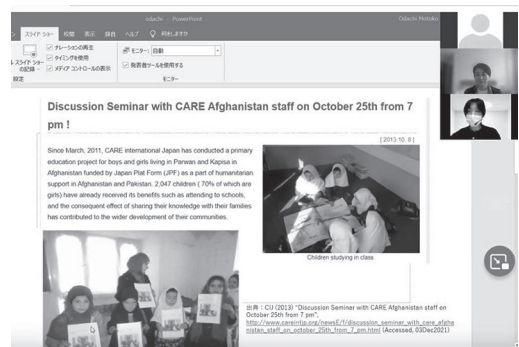
(平井礼子氏による基調講演)

原因の一つ目は、アフガニスタン内部の複雑な対立状況と、それを考慮した上での支援の不十分さである。アフガニスタン内部には歴史的に権力を握ってきたパシュトゥン人と非パシュトゥン人の対立やその他様々な対立が存在するが、必ずしもそれらを意識した国際支援がなされなかったことが指摘された。二つ目の原因として、外国軍の空爆などによって文民の被害者が増加し、結果としてタリバン政権へ支持者が

流れたことが指摘された。三点目として、対テロ戦略を背景にしたアメリカや諸外国からの支援は多くが復興、人道支援よりも軍事に関わる支援であったこと、またそのような大量の資金が国内に流入してきた影響で汚職や政治腐敗が進んだことを挙げられた。さらに、そもそも2001年のタリバン政権崩壊後の和平プロセスにタリバン側が招かれていないことも、その後のタリバン勢力の再拡大を招いた要素だと指摘された。

成功したとは言い難いアフガニスタンへの国際支援であったが、すべてが無駄だったというわけではなく、一般市民の政治参加の促進や女性の識字率の増加、保険医療部門での進展などが成果として確認できる。そして最後に、現在タリバン政権下で史上最大の人道危機を迎えようとしているアフガニスタンに対して、国際社会は最低限人道支援を途切れさせないこと、関心を持ち続けることが求められると述べられた。

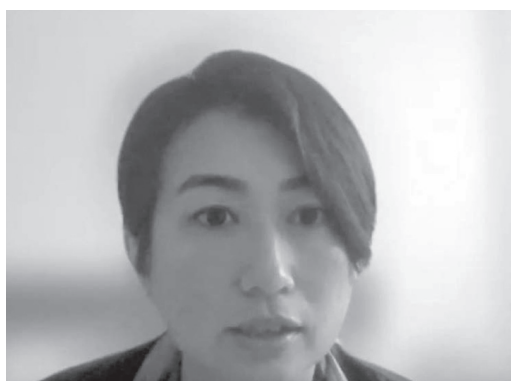
続いて、宇都宮大学後期博士課程に在籍し、認定NPO法人IVY海外事業担当を務められている尾立素子様よりコメントを頂いた。尾立様は2011年に国際NGOのCARE Internationalにおいて、アフガニスタンでの教育支援活動に従事された。活動の内容としては、学校が遠く通えない子供たちのために村の中で家を借り、そこに学校を開くというものである。活動の中で得た今回の平井様の講演内容と共通する点としては、粘り強い対話が重要であるという点だ。地域によっては女性の教育への関心は低く、活動への賛同を得られない場合も多い。考え方が違う人たちの中で相手のことを否定せず対話を続けることの重要性を、平井様と共通して指摘された。加えてこの教育に関する人道支援も中長期的に継続するとともに、問題への関心を失わないことが現地のアクターとしても、日本にいる一般市民としても求められるとのことがあった。



(尾立素子氏によるコメント)

後半の質疑応答では、メディアではしばしば「悪」と報道されるタリバンと、人道支援団体はどのような距離感で関係性を構築していくべきかについて質問が出された。平井様からの回答として、日本人の価値観と合わない政策もあるが、タリバンが勢力を伸ばせたのは多くの人々の支持があったから、という事実があり、「タリバン＝悪」という単純化された認識は誤っていること、タリバンは20年間、抵抗組織として活動してきたため、行政の主体としては経験や能力が足りず、国際社会の支援を必要としていることから、これを交渉材料に対話が望める可能性があることが説明された。

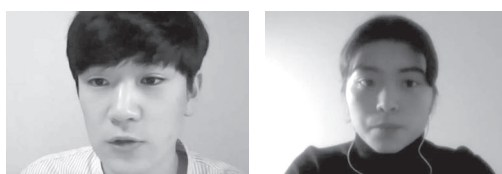
続けて、資金援助に関して、人道支援団体が中国などの国々と組む可能性もあるかどうか、また国民からの支持があるものが正当という前提のもとで、様々なアクターとの支援体制の組み直しが再度可能かについて、さらにICC（国際刑事裁判所）に訴追されるような人々も民主的な選挙で議員に選ばれることがあり、これは後々の腐敗などの原因になっているが、人道支援団体は今後の平和構築を見据えた上でこうした問題についてどのように考えているのかについての質問が出された。



(平井氏への質疑応答)

平井様から、まず政権の正当性についての問いは、立場によって考えが異なるものであり、タリバンの場合には武力で政権を獲得したことを考慮すると多数に支持されているとしても、正当性があるとは言い難いこと、また、人々の

命が脅かされる状況の中で、人道支援の原則に従った支援ができるならば、中国やロシアからの支援でも活動する団体はあるかもしれないとの回答があった。さらに選挙のプロセスを経たとは言え、人権侵害や人道法違反で訴追されるべき人が議員になったことが問題視されているが、「移行期の正義」とも呼ばれる紛争後の司法は諸外国ではなく、その国の人々が主体的に決めるべきであり、国内で過去に戦争犯罪や人権侵害の責任者がどう裁かれるべきかを議論する必要があると指摘された。



(司会を務めた国際学部・武田逸輝と阿閉陽香)

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター・連続セミナー 「アフガニスタンと平和」シンポジウム



© AFP photo "Anti-Taliban forces in Afghanistan call for ceasefire"

(<https://www.newagebd.net/article/148343/anti-taliban-forces-in-afghanistan-call-for-ceasefire>)

日時：2021年12月3日（金） 14時20分～15時50分

場所：オンライン講演会（於：宇都宮大学）

▶ プログラム

司会：阿閉陽香（国際4年）、武田逸輝（国際3年）

開会の挨拶：中村真 国際学部長

報告：「アフガニスタンと国際刑事裁判所」 藤井広重 国際学部准教授

基調講演「アフガニスタンでの平和活動」

講演者：平井礼子

国連アフガニスタン支援ミッション（UNAMA）政務官およびピースウィンズ・ジャパンのアフガニスタン現地代表としてアフガニスタン北部に約6年間駐在し、開発人道支援事業や平和活動に従事。パレスチナやタジキスタンにおいて開発人道支援やPKO派遣要員向けの研修に携わる。国際基督教大学卒、ジョンズ・ホプキンス高等国際関係大学院修了。



コメンテーター：尾立素子 宇都宮大学大学院地域創生科学研究科博士後期課程
認定NPO法人IVY海外事業担当

フロアからの質疑応答

閉会の言葉・総括：清水奈名子 国際学部准教授

お申し込み先 <https://forms.gle/955LqDjD8auw79ht7>



本シンポジウムは、オンライン（Zoom）にて無料で参加頂けます。大学生および高校生向けの内容となっており、国際法受講生の学びの一環として開催しますが、一般の方の参加も歓迎します。最大100名の参加を予定しておりますので、お早めにお申し込み下さい。＊本シンポジウムの開催にあたって、「国際学部教育研究プロジェクト支援経費」および2021年度宇都宮大学SDGs推進奨励賞【子どもの権利を通じた「平和」・「公正」の達成に向けて（藤井研究室受賞）】からご支援いただきました。

共催：宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター 国際平和と人権・人道法研究会
国際学部 清水奈名子 研究室

問い合わせ先：藤井広重（fujiih@cc.utsunomiya-u.ac.jp）